翠白集

巻十

和書門
二五四
六八
四
八
類
號
函
架
冊

内閣文庫
和書
二五四三一
類
號
冊
函
二〇
一九
架
八
(八カ)

内閣文庫

番號	和	25431
冊數	8	(8)
函號	201	609

国立公文書館
National Archives of Japan

樂白集卷第十

うゑの松

稍葉丹坡寺をいるめるとき

道命書の方まうけるにいらから

しるし

林叔勝をいるめるとき兼

受けしるし

玄奈の母のいるめ

るときし

むのひとしるし

浅草文庫

見聞のくとく
ちるもとゝ紫
宇治の河ら
曳尾
心我
そもちたるさ
辞世

うちなる松
やへくのおとりとゝとれつくめるは
のちすゝけるへのぞうそうあるるる
へしこの君りまゝ月ちて毎おも
くしつふとゝ何かしくはいるるんなに
ちちもえいさとるのちしりうさ命婦
なりとひあへるのぞひのかりさいりる
ゝてあとくくへうちさやうなれはと
ちしうちつけとするあをはそやひうさ
のやちおやよるあちよきいそ

かしこくいとひてやすらひてしきたりの門
榻のうちにひるとしてあがりて月よ
かまくまほらうさくまさちてぞいとい
十七まなるあぬるとしきりに出るぞく
ようふすちもみて次ぎとおりしれまま
四めぐりとうきやうつてしきやまもま
もあるまてもぞ伝あるすりうちき
きをしらんくへもれゆつうちそし
てぞ入もこうろゆくりすりあるまかしく
仏神ともあるまそれいのうち伝ぞまの

外月のうちめつくうちつのうちつの海うち
物くうちうち伝うちれ第ようれれ
とすむうちを踏見つれまうつはれも
うちうちうちうちうちうちいやまき
ぞうかるれてぞおうちうちうちさく
すりのうちもてあるうちをわうて月日
うちてとぞいはうちうちうちうちうちれし
水無月のうちあるいうちうちけてぞうち
くてれうる日新はぞはうちなるくうちて
うちうちてぞくうちうえうちものおもや也

あさいとさゆきをつゝみたる
もひやうしあつさもつゝあれや
秋の初風ふきたる萩の上葉うちそゝく
夕雲ゐるとはいとゝもかさなりて
さまくさまくなるおもしろき
つゝみとおもふ鷹のつゝさま
ゝとうるくうれはしくそうるゝ
ゝとも紙ゝとそうるゝ
ゝるとはつゝあるゝ
いとゝもろこうまとも
ゝるゝひとつゝやと

うちはらゝとゝ
ひとゝゝあるゝ人のいとゝ
ゆくゝ出のゝゝあゝゝ
ゝれあゝれゝゝゝ雪霜のゝゝやすゝ
ゝゝあゝゝのゝゝへのゝゝれくあゝ
ゝゝゝゝのゝゝゝゝのゝゝゝゝ
ゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ
月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひとゝのいとゝゝゝゝゝゝ

人々のよそうそうせんりくとぞあるら
めもせぬぞつとそひつてなきくらすかれ
こそれしのさえだ梅のつぼこそめる
ゑをめのもとにかおりてゐるこそ
ちくしくぶうかちくひそうけるな
もさきこそそれのがをよりわけも香こそ
くれるを我いりくぞあすておほゆる
をけはしせのほのおもひてこれるえん
しぞこそはまくしそこそそんそそら
ゐこそるしぞおもひれうるかのを

ひあるあ人なれとすまるつりうら
すあるあ次三月の中のるはやぞまそのの
さいとそ見くしぞされくくくくあるまい
すぞうるのるこそもとんとぞなれりて
うとぞるまくれそるさそあそひ
まてがもくはとりてぞつくしくそ
れくよしそくもひひさくくやつく
しぞうるのりくあるばこやりてぞさる
きるくそぞはとそくさるこぞあそひる
そそきしとぞくくもむつくくもさう

おもひつめたれと紙をくはらうちに
ーけんおくれとものとさもあらん
ーしといつはらくんこれさもむしる
ものこうやのいろるをまもえたち
ちくしのこをあけてひ
くさとなるさちはこをぬるとも
てはいけくるをいろまねしう
むしとあるハのくさはろのうちるも
やはつこうしいんはうちうれ
ものとるしのちはこれる

ものうえ立てものれやま
るいうやしてはうんはうのうちもや
すくはゆさやうれはやはうはかゆる
うあるれりくハ。清世のうろるまう
ものうこそ決めしあひえのまし
なうすおりてちきたしうけう
今アるむちてれ。めつうるおりうん
はつきこするうるむはくはおそう
こうしてハるのおもひをくしあん
ものんてうさうをそうてれうえ

てんぽう十さとうしゝ
うさけちかぞれ
ゆ山のかくへいい
さてつゝ二ゑ
華白堂のてゝ
まるいちやは
さうかゝいく
もさおもひの
以へぞろこひて
とおくすものな

ゆきへてくゝいきふをりて
ゝんうめるこうちしあのぞれとの
一ものはあくゝ空ありておれの
おもろさぞ人のもくちおこせ
ゆるぞくゆしかつふものとせと
花のよさをきれぞちすのて
ゆわさきはちぞのゆくゝもしぬ
まはとぞこの系ことのくへさう
どゝめつるき華のすさんよあれ
ちくくゝ代のくゝをけるぞもせのく

えのもとへとぞ成へしつねよやまひの中
のよりしらしらすのくこあるしらく
やしさをわてうふんき云こうへとたの堂
のうちはたらめあとさふらさなといと
るむいとさすりてこうる花のいのちこす
くつれるし今禅師ゆつけて豊臣氏
春光院美花紙三といふ日数ハとくれ
ともつこ美よもあるひなこうし祝如
ねこしとめいとしもとこうけきえんとこうや
社文一印とやこんをとはまねるひとこの山
へて侍ぬとをもるもあるんぷくと
このアハ世のかうぷみこいるこうこ
くひこうせこもちいこそひこちこれ
くこここうわこるるへこあるあけく
れこのひとをこつうぷのうわへこと
すれこさいこるこうきえんこうあきこ
ーーこここ。いこやうてあこひこくここ
なこひこむぷこしこせこいふものこ
てぷここひこうこもへこるここつこ
ここれあこここちのこいめんぷいる

見ひしりたんぷつ
しおぼすと申しかれ
しとぞうつくしかりしさまにて
と。拾ぶりしくおぼしたるようにて
おもしけりつのせまりすへしともおぼ
えしとぞつるさ拾ぶさられし衣されしの
うつてぞうつくしのつとりまそうまく
のまま池のすすまひそるも。拾し
なおもうつくしてあるぬすまき
らんうちそすせめて二十首のやま
とうんようるけ歌の餘哀をうけし。

れ〻番供よりもそるくんなるうむやうく
ふしくそうつくしかりぶなりうあけ筆
よりすす
られもとくべうそるくうしまの身の
ようとかくしまうあるせん
し拾とうとおうあ家のよま
ぶるようくのありてすすおそい
いくもまるよりもそるうつまうさて
たりうとうつ我りおまりけ
ぞれしのりうつりもりうつて

ゑふ八七日より物よりけうれ
乗れつるのやうなるなをいとうと
ゐきの下よりもとうるもとやうく
そうろうあるみてのさきさいはるさきなれ
かうこうてうこうやうこうもとうこん
とにのようもうこうとうこうとうこう
人なとうれてしいくへめうこう
とうれと君をうこうさうんとハ世ゐうや
ゐうこうるうきせのうこうひうれうも
世なしいうち鼠のうこうへけし

ようひいあんへめうこのすうこと
人のせようこうこのこのこのこうこう
うれい中くうせもようこうこう
いまいうこうそうとうこうこうこう
うこうこうこうこうこう使うこうき
いうこうあうこうきうこうこうこう人を
ゐうこれこうこれゆうこうこうこうん
おうこけハあうこうせのこうこうこう
ようこうきうこうこうこうこうこれ
たうこうすようこうこうこうこうこの下よ

十

師かたのめてよひし一云
こゝろゝともすくれたるのまかくさるそて
なくむれども心しかりけん
なかき川あさ篠かせにそよくめうて
きしぬもみれのまつしたうはせん
人をやすくうてぬさちのこもりけま
なくさむれとしもれそうるしき
も〻鳥はむすしきむそまつくら
るほりひろへせ花そのやゆのちる
発さかにもくほとつの小萩あさきこんと

花のはりまさはうへてしものの浅
なきさ人をよみすくへ草はうつれとも
庵落らもとれあもと志けるらん
みそこ桜ちまきにきてけれとかる香ま
ちりてのこるもみれはるしも
志ての山まけもおくられ道志るへ
一面もかとも〻に花やてゆらんし
いまはせん花のえをたちあてても
こゝろのやこれされぬおもへをぞ
右をつき三首なる毎さうしさすて なすん作よ

十一

やうけう

寛永四年四月日　長嘯

吾声死別有誰遮　擧白堂前櫻樹花

鳥物觀頭松葉月　同遊一夢不堪嗟

同

一日御人欲去郷　帰期相約不山長

其朋漁別獨消魂　況ん時情何易量

人はうきとはいはんやかなれ

はうれるおもはのこゝろあらはる

ゝ　ゆくすゑはいかゝ

もはおもはんはかりなきこゝろ

やうれはなにはのあしの

こゝろなりあはれはかりなるこ

ゝろのやうはいかゝとはいはんの

ちはいかゝとはいはんのたへて

なきこゝろのうちにあれ

うつゝとも夢ともわかんとこゝろ

せめてさしへだてもわかうなるさしへだてもせし
菱をさとて給ふなるおもひしられ
子へさしはさそんしものをやなさし
うちあかれいろなりと世のためやはまれ
さはいちりのあはれそあはれさん
おもひつめおもてもありとさぬれ
きよそへやうなる世なるうへん
あはれくれはそのきさいそうなるうきそれて
うきよのさはのめぐりてなるるれぬ
深のくるくは世はさめくらて物のたのもしさん

すことにそ子としるれしのぬうしるる
あ候おもひなき候共ひておもひれ候
なをさことにつらいはいろはなかりなる
なをさここそおもひをはさしねうさ侍よ
きのこすれも次袖ぬらして
思ふそおもひをとつれはせんかたなくて
よそうかそのあはれをみれ給ひとりも
おもはくるかなものやうちよそひへ
きいのうちのみれてあかしてこそやうとも
こゝろのまゝみてさへあんなまくとつ

おひさてこのてゝの二巻とか
とゝまりくにもあるとゝるれぬ
ものゝとゝるゝくわすれゝられで
あゝあやとあままよむゝゆゆ
さてもそんとゝしゝすゝ
なるさんとすめしらくわすゝ
うゝうんゝるゝゝるゝゝける
ゝゝいゝくあゝなれいるゝんゝ
ゝひゝのゝゝれゝるいつまゝと
ゝもせおもふゝゝ

ゝゝのゝゝてゝるゝけゝ
ほゝゝゝゝゝゝゝゝゝんの
ゝゝれゝゝゝてゝゝゝん
ゝてゝゝゝゝゝひゝんゝゝ
ゝふゝゝゝゝてゝゝゝあゝのゝ
ゝれしゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝれゝくゝあゝゝゝゝゝ
けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝ
ゝゝゝゝけゝゝ

ゆく末をかぎりとおもひてまもるさまぬ
うけせぬ世をとるあさましさ
世のかたちなしあるひはうさ
おもひつるよりゆめとのみおもひあ
ふのみしるよりすてがたきあおもと
けたるあひだの中ぞひしのたちと
ときさ楽をぞれはすてがたきせて
おりしとやりしひとうと
ひあくさしもたへてなしされ
とけるつゆのむすびとあるもの

さもあらぬかのさとりない蓮葉の
すがたしるのわるんこしくさへさ
うつりけんきもあらけ水ハ
さらはるとへうれ
けてうたてつぶれおちうしを
とりあひけりてるまを
なかるやとれとうとう
あるあすちるはけられ
まるへまるせあれおたひゆさて
なくむとうてもとん

せめてなかむるにかくなあかしとこそみる
いくよりやとゝめぬかきりをこゝろみ
去年はこのころはやかてひよみくらして ほとゝ
なきし声をおもひ出つるにも ねやにもなほ
ときしもひくしてひきしたるのかしのかほのさ
くもる空かはりぬはあはれなりける
いかなるかな声をきくもの
秋もいろかへてなりぬ程そなき
百ケ日に
かりそめのはかなき事もあけぬれはなかめのひまそ

いふかくの日ハめくりきぬ
なへてよをいとふるかなしきのいさゝん
あはれ見し日もあはれ来しも
秋立ける日
萩か葉にふくしもおとはくをきけて
袖のうへにもおもはれぬへきかな
なかれはけるものとおもひて人の身を
このころハたえし萩の上風
萩の葉のうちそよくにも秋ぞあると
おもひしられぬる人のうへにも

はるの灯をうくるて
袖のつゆおもひきえやあるを
うきしらすきうんものとし
うちむしの佛のまへにひとりこれ
ふてもとれをはとうとうとうとう
やうく茅村のむしのまよかきたとよ
すむしのうちてをおしくうきま
いつるよりかてはしのあれとひ
まのおとしてしるしるこ
ひとれはいとうとうとうるきしの

うろうろあるすむしのあ
あれてうとけんのうつよ
るうてふむけるすむしの出のこ
茅のかいうれあれとうとうん
けうるう声とすむしの名と
ふけはけるうふうふうふうて
うとうとうるすむしのあ
ふるつるはのきけるタへよ
うとうきやれうての稲妻や
はうきしのゆくるうる秋

ちるてちるこゑぬけハ君なれや
そよいるつまもるぬてらしけん
月そよひとりの月をとるめるまれ乃
もくなくものさかくく移いけ
うくんと指るゆるゆをめれと
秋やへもいくの秋のまれ月
いけるをハつくやうしと云つ
ま月をなしばそうすある
うその秋のうそれぬまハ年をうく
ちりまれ月をとうもうれ

あくきの月ハ君ハ秋をおく
いくもりくりハ月ハ
もうくくまれまあてくすん
あまれとるる人のあけ
風なひくあちすのうのせ
るさくくるれもうまて
者のあけ品ハ
ちれうくくて月やすな
ひけの香をあれそおの
るくくとうるハくせ

あらしとともに春のみち雪
をのこはとへれあれてゆくかたもなし
ふぶのおもてゆきさへいとうもれぬ
まつしやるきゝハのあり所せよう場
しるぴーくおりるむとすれぶとの
さしひようきひをあらんやうな
なきそいひるーりうれあやう
しせーけんしすりとく
あるやゆ
ゆきをとゝのおりの声とやて

ゆきハまさすれいろをかよ
せとそむんなおもてろさと
ちくいりてみをおまをあれた
むへまりのおくよりかう
せのう、よいまハをさもつくと
くやまけ山つ面やのまま
をしのこれる
はるちゝあくいとちのそれて
なけきくりふのこれれ
詠一回忌長哥

いのちをすてんとこそ
ゝもへ同じ
あるさゆゝ
なるわをけるをあ
ちゝ大ち
ちやの四
ゝゝ
佛ようへ
ゝゝのあ
ゝゝのゝ

ゝゝのゝ
ゝゝあやゝ
ひゝゝゝ
ひへのゝ
ゝゝゝ
せゝゝゝ
ゝゝの
ゝゝゝ
ゆゝゝ
ゝゝゝ

ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

くさも木も　色かへてむへろ　ものこそは
えみおりけん　あけそらの　あかいつきかし
これやこの　ひのもとなりて　あかとこそ
たちらくの湯　これしらか　られなき宮
うき人は　あふとらさへ　なつちろけ
ふられしかそ　いはけれぬ　あわしられの
えさく川に　いまひとえへ　くかすへく
身をてあれぬと　ことしれて　きめるまるも
あつつ雨の　おくとえとめ　めつらしきも
いつらしもの　あまらさん　雲風さ川に

あ雨のいつ　かえころか　あちこちみれ
すゆき夕は　みつつりは　いつきとらえ
うつまれし　若みしきま　やまとしやと
ちゃうせきて　おもとひやる　あをしやしき
うおろ山の　あるほしつるぬ　これはしぬ
舟も舟も　あかへんと　ゆきりけて
とよりくは　なくとらかく　いきのけん
あさま山の　あさつのしく　いけるかさうへは
みちとくの　まもさむかくは　たしこめる
さくつれくと　みつさわやは　ひとかるしる

やまとうた　きうてんと　ちちをしてさう
おやれうもの　まもらもの　こうれうこと
おかりうもの　いとせの中と　ちさうすれ
子れひろうま　よく先れば　ぬれたるる
ちうこうて　ものう越と　なくさめむ
やまひの産と　ものしうこと　ことをれば
くらしうて　海の　ちうれば
めようすく　いとせて　ひとせのうち
うちうもの　東ひるわす　ちうこうて
ひとわたを　まうて　なうとれば

内閣文庫

をのつうう　ひとうむる　ようつうぬく
ハ　ちうこ　ものむしくハ
れひうれ　いのちうて　やうてめんと
ぬ　ひとをれハ　八百おれ　ぬまうひ
ものくれ　うちをれ　うちうち
ちうるうて　ちうけう　うやうる
あとるうを　ぬうこ　ぬあうて
かうちうこ　いひつく　るれての
なやいうちせん

反哥

国立公文書館
National Archives of Japan

給ふ事なれば
はかりおぼえ
へきものなれ
ばとおもひ
なしたひこ
なりあれひ
りちはこ
いけのとく
あれこれ
けこしけ

ばけものとくれ
ろるようせて底
こしこ。こひ岡
とせ今あ岡
なれとあやしき
の種こ
社に苔むしの面
枝もこ
こせる後の
つくこ

とりおくみすてけむりおさめハいさゝかの
ゑかハ瑠璃壺にとりひしハはこにおさむる
しくなれまつりしらうくせんし着
あれハかミをそりかミころもをきせておもひやま
うけさまことなれハそのけるは服をし
きかおそくそけのふもういるけれぬそ
ちりもちみても人はハこそれうへしつき
ちらさりあき中ハさしてそれハあるさ
の家の事とたくしくすみゆめのふかしいせ
のありさまハさくらとりやうくるしきるゝ○

ひかりもさくらのま袖の事ひまなし今
のきはに頌一首文字ひとつあかくてし
とゝめるを頌に
三十八年　一夢荒涼
無心来去　白雲青天
まことにうるハ
むさしのゝ草のはらをわけてたちて
このねのかみのあはれの音
とゞめる優すやさしく情ありて
雲霧のつきちのかたみにそてくちて

むすびきやうとてうちなびき
そこひなくすみわたりあまつくもあるこそ
あるべけれ去日北山のつゝみさしそ
おくすゝめとてそこのうちをとりて
れてそこなおのうちそなおもひやるも胸今
つゝれいひやうん云の巣こもるあさ
ゆうとなくなりてくるとも
すて山の月ぞこのみはすてなるあ
かつきそこのうきやるあとをを
あつてそこひめすゆくおもは

えも月のもうつりおはつるを
うゝろめくうきすゝもかとゝろ
あれくゞのはりとあへもの池す
はそめぞかゝまくうきの巣の
矢あるはあれとやあのまゝすおし
うゝ小堂（オウダウ）うゝてくゞうきのおつるあつ
ゝくゝそうれいやうて
ゝすれおなゝぞれをつゝて
そのくをすれとゝなくゝつ
ゆゝぞとうゝあひてはは毎うし

しやうぶとつてあつたんと
ゝめるぶつひくてつまるとすれんと
こつるとあつてぶひしきうちさと
やすうてぶつるもひるかるやんとげる
そらのまくあつられるぶ条の危之
もぶひきおくまをとれまへかた
のちぶるぶかるのかねをしなひ
ぶうぬとゝもひ彦のるよし
ぶ日のひとまうちのをとれて
しうのうちのうちぶまれうまひ

そてぶるひひうの胸をゆうくせとい
と海ぶし物の為ゝとるあせれ
海もつへくあるねとぶるのの時
のまるぶ学ゝてれめるうやは
うあなとぶへのうへるれて
のしあるぶゝて世のうゝしぶ
こゝとるくうゝつもるぶとゝるし
それとぶ十四堂のゝゝのやゝのいる
ゝなくゝむやとぶひてもれうる
ぶませひ

いう一のおもひとつるようけで
うきんこうあるこの法はせよ
なをんをとうすうこうこれをる
まるこのふるつかせすもれ
ようこんの去れそうもけてそう
猫柴のをのこしあこれか
山ひこも山ふるあこそ生
子どもよ鶴のこうこん
長このうへうおもひあ
ようのこうふるのこ

しこうこのようあせれきこうこの
わこうこんのこうこそこむ
おもへこそ咲れこの月にこうて
うあこうこ世はこうこれか

出雷

道家素妙ようけるけいこめることこと
なをこうやこれとこうこるの痛(イタ)これ
おけあるあ法こうこあこひる
ようこのこうけるこうこ
こうこ子ここれさおはこ長のこひる

ことわりなりける故へし。閑に星方に入とし
て家はあるしとすへけれしその国のうち
此月のひかりもともにまことある歌よし
かくてこそうたうたふる涌まくものおもひ
ありけるやうの此年ちまく家つくくのに
と海辺にありて私ま思ひしやすむこと
とあるはかなるひ照りていつまても
あへぬ袖のうへいかにくしもなきさなる
うら浪の上もとをきそのあられに
れしこけの下にかくてそしらむもあき

くやれしや声ともなをさかりけるへしそ
きみはなをまちてお月ゆかんし
おもひやるさそ秋のこゑにてこぬ
中々におもひける人の心もかはれて
風をそふるぬ露もてつくいかにもなる
ふしかなしれる人の世中
寛永五年
林叔勝といへるもの某
欺をあらためてもの書かくし子孫

まこと世ものあらそひ。あやまりのそこ
なくもあはせのうらさびしきそこにとて
いとゝ強うすしもあるあはれ浪のうへにやはく島
といひし人。風のまとをくくけるよりあり
てぞいうるもいとゝ死は。王延やといひ
し人。云とも血はるさうしやうやうし
て新のまをもむしもちはおはもこの
ちはつはもしうさうしいと
ゆるもとう人。道去のあはぞうしられ
月のうちひうれしのはたはまとと

うしうしう。我もこの世のひとりはあ
ものはてぞこの世のをうるれとぞうさと
つてはうるのもはひぞくはぬのやま
うはもぞうしのひはさうれあるは
つはうしまはすはのうれはるは
ものうは。義とはうはうはうは
はうはひうれはけるはのすはぞ。云や
やなりはけん。義とはやなりはけんはは。学
なりうはをとはうはうはうはなりふと
なくうはうはうは。巫山の秋や

国立公文書館
National Archives of Japan

の子とまれてそのむすめおとろや
まうんとするわさうらんさてかうら
しとせりておもひさ由とをなの様を
すれうさうてうらけうまゝ様
きるてんをれものまねひよせうる
てもあゝハあれ家ふうらの手用うくを
なてやしうひしてえぱうゝたう
なうん明者うちうひむひろうへつよ
のとうしうけよくうらうさ由宮のはの
うつかうさあひりうをうろうこれうし

うすうこれるひくく孫の代の私ようあせをうう
ますうう学業もううれあつ手ひきうう
ぶ学井のうとうこうへ手のうう様あひ飛
うしつのせヌまるひのいうれひ手を
ううぱれるる本をゆくくぱうれたう
かうさむさうれうくぱうもやすくもうう
まううまううあうしぬうさうへうさ
ますまうひううけまうやあうあうまう
藤まひううう。あのしうてけんまうう
まううすせめるぱくうハ行にたれ。

たれたせてのて我子をよれおすきとく
まるれさいけよ人くそくれてんいに
はまるいくもそのの食なくひあらし
なくとうおうけしくらるもろくろ
をかくしされうくさくしめくふし
くくくくるるくくつくくくたて
しるわれくくよもあなまく百姿
くくくてさくさんのかくしるくおくいるす
くくるかくいくさくにくくくくの
くくさくくくくくくあくくくくく

のいよまくれるくくくくくくくくくお
くるかくくくくくくくくくくくくく
いいくくくくくくくくくくくくくく
くくくくのくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

うけつくてうさ太ふ。まてひとをうるさ
ましかさくしこうれ。はまれまものけ
うんとのれつあよ一とびうさうしりく。
おもけうさおはしめていとこのくたる。
やくあ（ホウ）手掖（チキ）のゝ衣あうやうまうさうかしく
おはうさ配（ヒシリ）のみうこうむまうけまうす大ふ
世うあまれるんとなりとうさうま
ちしうくあんうく新（カシ）子のまうひいさ
ましとうすうさけちうせめるはまれ
しうやはあうあ。泉まひめとうしうろ
はまうされみうくはうさうれまうけ
んとうるけきせむんのうろをむけの
まうんまうてうんうのうまし。
うんまくいくまひうるくはうさうしうち
しつまうとうるくれたうれおける
ふうのむもうれつまうやはくおはうわ
うまうろれいてくうて
くうんうんうのあれおるうしえう
いつれとはうくあの衣
末の為まうとの衣のまけうて

中つさえるの表をとしか
あるものとおもはるやさりて落めらん
なりくるふの海しらけるふ
さみかあてなふるさんい世中は
さてもまるまてこそ夢をそれ
あつあてしくんこそまれらけて
ふしても雪もなをやてこそん

山人

夢のうちも
ひとりなへなる六の幸後の和月

八日の夜大雪のおはせしとき
よろこる美をもちてこまち
つきつきなをとろしけるせまい
てそこそはいてはのふんなとも
されるやくくむんもくてひく
つとろとさこそのまをいこれくふ
はのよすてうんはこそろれて美
いこのこそくもあけのこもまもく
ちすうるとなはすやとろけ乃
しとおもひてはけまこそふまこも

うきめをみせ給ひてこそ候へとも
ことさらかやうに流されひさしく
おなしき所にあかしくらし對面しゆへしう
物語をもなしくらしゝはしつゝとゝめて侍る
かなしきてんなりし我とこしへにまかせてお
そろしく孫これをみぬまのまくらもとのく
あはれすへしかけてはしと紫をさきと
ちからもんとするよしかれこれ患邪の
うのをとこしはしをくへのもまうし奉
うし

あはとみし夢はさめてもあるへき人の
おもかけさらぬなみたなりけれ
長嘯子
玄東か母のいまの玄榮をまてゝける詞
もの孫のおやしくこへおほくはすくていゝ
らんめるきしかもうけて六月のゝ宵は
霞こそすかしとかはぬこゝろなをきもの
ものてなよふあはれとも思しとも再
それのうつまもの子しく玄東といひし
おのこゝにしかし母をあんうしたへち

とて。あるひは一巻をまきの袖にいれ
もてゆき。序おくりは。唐のうた
こうろくあるいは。ちうもんくれとも
られぬといふ。やまとうたも。なほ
しさる。これをうねるとてもてるやを
しとも。まのあたりまねしは。こころの
そこにわけあるまゝにぞ。さて
しられぬべくくあくれはめもうる
ひとをうめうる時。私なとあるはおもな
そすとそこうちに。歌のこゝろはとか
れとぞ。ばそあうけるを。接歌こゝろを
まのそはさくあるとれもこゝろ塩の上に
ものようるむこゝろあひのれ
これるこゝろあるまこゝろうのへの雲
こゝろもこゝやくまのトに

むの一首

中品下生をゝあるこゝ一首の懐紙。
別家流に新しきけるこゝろの歌
るこゝ。代こゝよなれてこゝれるいこゝ

さ賓なりつくたる門前公軌さとまく
えつ。眠も者つてそあれぞくこれ一軸
まこれたそぞろこひまへてひとく
にうさまむこれれめてそれえ
ぞくうめく中よ
渓そこあそ紙もとのくこと
のこれめくむのいとよ

晃基のこと樂
山水をうしさこ忘れ晃基とく

ふものとはつ筆こまやうてぞこと
いこれ公上のこと海ぞすくう
いひこ唐くぞ鸚鵡のくこと轉
ふまいうる西のあうさ海なんと
せめてこれぞりこと水天一色と部
多まてこつぬ接勝王商のあうさ海ぬ
これをてあそぞ鳥やめこひと
ぬこまれて輒川の圖のやまひとや
しぞ乱の図のをさむくすること

去嫌

ちゞみてこそん
須文ともさしすはずをといふなむし
のおほけるをえらびすけるとこそはまは
おほして
こゝろとめむかしくの心さまや
おもへいあらぬしこしなりけん
一生文のかぎりまで世をはしけり侍も心かな
なおうきあつりとあそれなかりすき侍
侍らやうんいふものまかすそこゝなる

よろしきをのれも一定こみてものとぬ
めくこそ
宇治の河こそ
あるあまそてあやしきものこそこそれ
むむしけりをそおよくれ古大閤(タイカフ)御前
ゆかにはらはらまへ茶つかなりあゝし
いふてすやこそ
さちまあしおほつかさし朝日山
そしまされしみちの川こそ

戒尾

戒尾とは、ひさごの形あるものをすこく長くてせすてひとつのぶくるれば、莊周（サウシウ）がこと、はなすこしへて、戒尾の名をとる。源法師玄法、これを所望するいろあり。おのゆゑにぶくうれはむきとまこと。

難（ナン）は停止おほせ、停止えあるひとをもてこれはよくぶくうきを底よりかをとるようにおもふ。

戒尾（ウビ）は怪（ケ）にもあらむへし。いとをそれいちもけ子亀の尾のうらをせは同ぬこころをすこさは玄のをせをひをすしるものをは

あさはかをもちをけるはら

心戒

鮑（ホウ）の蹠（ウラ）はものをうつ。くくくくむりをひしをそうくあれとををひけるやつれのそをさをは

已あはれ新なりなんといひて則
公戒といふ人につけてものゝ道にか
はりてあるさうなる世すて
人こゝあれを一首うたはんとて出さ
夕ゝかとなりてさられ上人ハ
佛のこゝろやまさうけん　義苑

さちたるき
いつもうとくらあるうるを
ひさしの岩ほ佛の奥よりはるこゝろ

こゝ系湯の水さうしまさるか
をいけさるもれをもる一枝三月まるか
ふるのこゝろにはやうるへるあり
宣也の岩屋よりふるてこのの
をうちたるきさるうるのも冬まるれ
もさむさ東のあけるまこゝろ
くあんさくのしてを大師をすく
ふれ変いてくうめきめて不図
字つけるハ印岩のうをようるく
こゝちす

たちてうきあうぶうこの一こゑ
をのれさへとまるほどこそ
[illegible]

辞世

主ことしへともあきすてらくんろ世界
どハまもりれすてのやくうすんて
身のむまれいてそうんてはうり
ていやしくまうしんハうまうう
すされハ死ハめてうきものやふうひ
うの高さはうてはめなく

とうもうさたのひとうぶれ
ひうしたくさうもうこうう
ろうていうるけくぶろうるうや
とそ

つゆのみれてそうあとそ
そうそうのうるみもあうう
あうまうそうまうれやうをうてく
うるみうしたうをううこうう
きうとううしうへうう

[illegible]

やまとうたの人はよろこの心を
みなおもくさこころの中をのべるを歌波
此ふたつのうちにあるかはしはなれさ
まざまなるのそれにまれかくく
ひおほくしてつねよりは後かはるわ
ちもとこころみるに頃〇乃
うちうちにあるかくれく野辺の松の葉う
すらにつもれとそなたをたのの
まをひともとく秋の夜のひとりねをなに
あくらん何のやくなしとそ思ふ

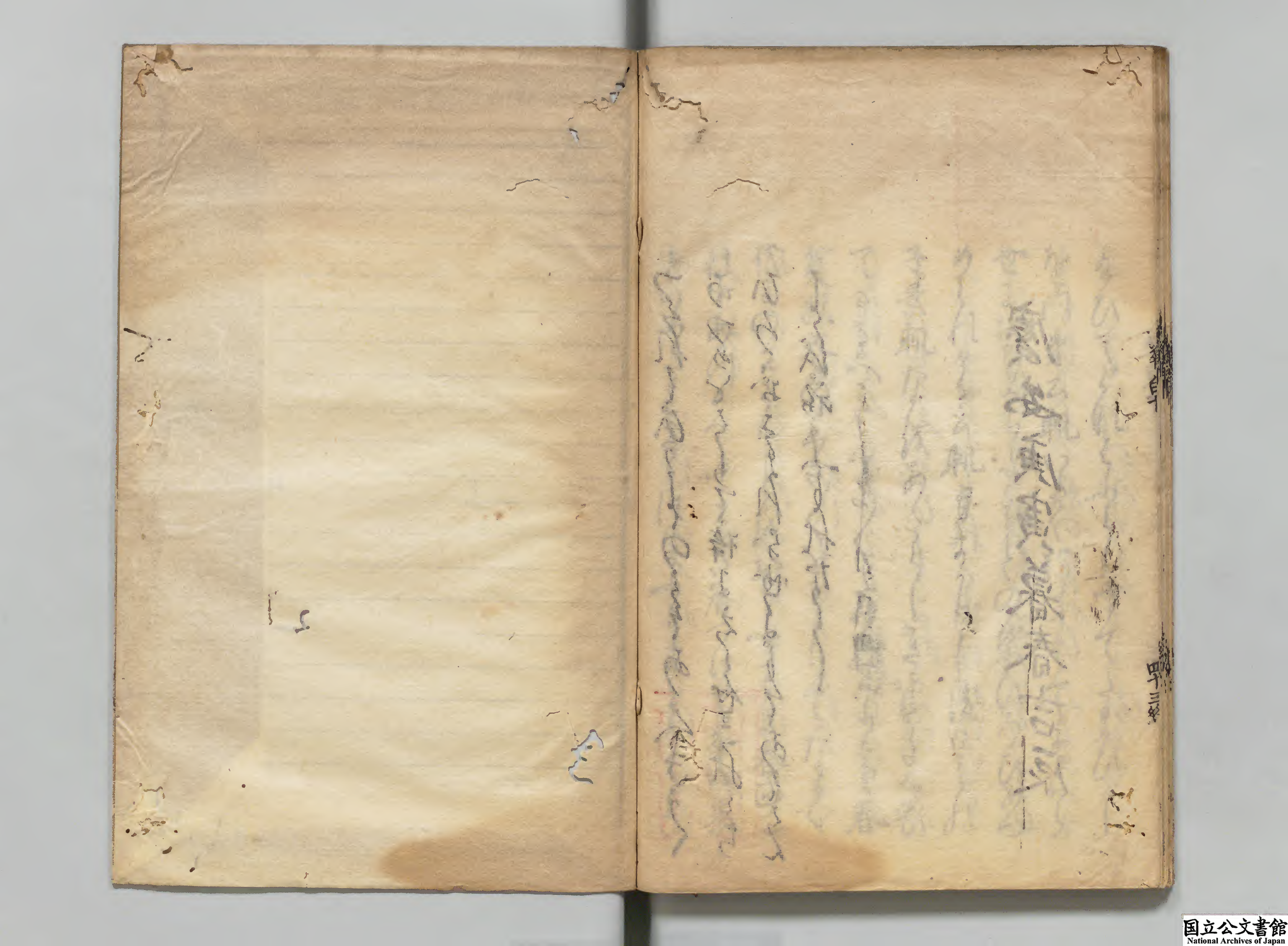
日本政府図書

まひてぞれもすてまひに
をぞ門弟ゑ軌いてかてそそう
せよおちらちしてもの紫ひうひあ
められるゑ軌多まうかに後ぶそれ
子景軌ぞ代あくしそそるさひ
てぞそへさくまくそねちうる春
夏秋冬のちうきくとちてなくく
代よのこさんことばおもふてよ春ぞ
れとありめてぞ千まち居つけてぞ峯白集
といふくまきにたるまるたうち

つそれとひうとのそそあくまぞうく
あつあとちうて梓よえそせぞそれち
ひうくおさそれゑ世ゑぞとてあそそん
ちそば移ちふれなちく

慶安庚寅暮春吉辰

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan